ICCS Journal of Modern Chinese Studies Vol.2 (1) 2010

論文

日本風水史

渡邊欣雄[1]

序　本発表の意図・目的

風水研究で本シンポジウムに沿うテーマといえば，学際的に進んでいる中国を中心としたグローバルな風水占いの研究であり，それが日本にも及んでいることの紹介だろう．現在，日本の風水書のどれといわず風水が中国起源であることに触れていて，グローバルな風水の表象研究として十分な意味を持っている．しかしわたしは現代的な風水の世界的な普及以前の，基本的な東アジア風水史に興味を持ってこれまで研究しており，たいへん遺憾ながら「現代」中国ではなく，中国の影響を受け続けてきた日本史としての風水史の一端をここに紹介したいのである．なおまだ日本風水史の復元はほとんど誰も注目しておらず，中国の影響力を知るには，その基本としてその歴史過程を知る必要があるためだ．

本発表では時間の許す限り，日本に与えた中国の風水思想の影響と日本における風水思想の形成を，科学史と占術史の 2 つに分けて略述し，お話ししたいと思う．

Ⅰ　日本の風水科学史

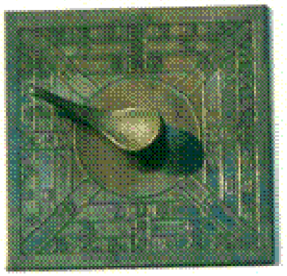
1　中国に発明・発見をもたらした「地理」

風水科学の歴史は中国を中心に東アジアに普及した歴史なのではなく，世界初のさまざまな発明･発見を伴った世界史だった．「火薬・紙・製紙技術・羅針盤」が中国による世界の四大発明とされている．羅針盤(羅盤)の発見と発明こそ，その典型例である．羅針盤はいかなる必要性から発明されたのかといえば，それは「地理」のためだった．中国の科学技術史を復元した J・ニーダムは「磁気羅針儀が最初『風水』目的に開発されたことは疑いない」[2]とし，したがって「紀元 1～2 世紀以前には，地理は疑いなく地相占い(風水)と密接な関係にあった」とする[3]．同じく中国の科学技術史を復元してニーダムの主張を補強したＲ・Ｋ・Ｇ・テンプルもまた，「中国人にとって航海よりはるかに重要な羅針盤の用途として地相占いがあった」[4]と記している．

２人が当時の風水＝地相占い＝「地理」と密接な関係にあったとする羅針盤(羅針儀)とは，磁鉄を用いて方位を測る指南針のことであり【写真 1】，テンプルによれば紀元前 4 世紀頃には用いられていたというものだ[5]．その後地相占いと結び付いた「地理」の知識は羅針盤の改良と発展を促し，やがて現在風水師が用いているような羅盤へと発展していくが，中国における「地理」の知識とコンパスの発展が日本に与えた影響は少なくなかったはずである．

そこで，類種の日本の風水科学の歴史がどこまで復元できるのか，わたしがいま理解していることの一端を，ここに簡単に紹介してみたいと思う．

写真１　漢代の指南模型



2　日本への「地理」知識の伝来と応用

何人かの学者たちが一様に指摘する日本への「地理」知識の伝来は[6]，『日本書紀』に記録された「[推古天皇 10 年(602)]冬 10 月，百済の僧観勒(かんろく)が来た．暦の本，天文地理の書，また遁甲方術の書を貢上した．こ

のとき書生 3〜4 人を選び, 観勒について学習させた」という一節によっている．百済から輸入されたのは,『易経』(繋辞上伝)の「天文地理」と同じように天文観察と対になった地理の観察知識だった.

この記録のあとに「地理」と同義の用語が，さまざまな日本古代の記録に散見できる．まず『日本書紀』には皇都造営にあたり，たびたび陰陽師が「看地形」を行った記録がみられ，また『続日本紀』の和銅元年(708)，元明天皇は中国の遷都の例にならい「卜世相土」(日選びと土地観察)を行って，今日にいう四神相応の地に平城京を置くことを宣している.「堪輿」という難解な風水の別名もまた,「日者(日選見)や占人の言うところの堪輿雑志に載せたる説は，賢聖の格言にあらず」などとして,『日本後記』巻 20[平城帝・大同 2 年(807)]に登場している.

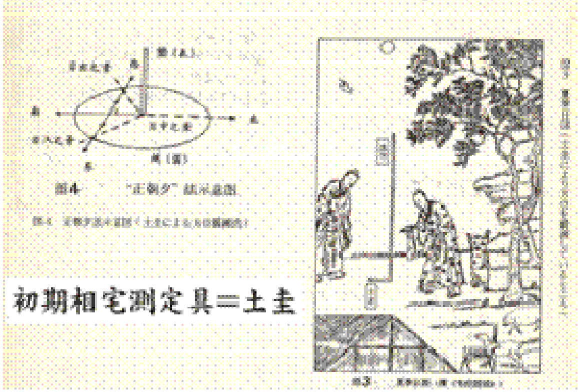
下って 9 世紀の『令 義解』(職員令)には，陰陽寮の陰陽師 6 人が「占筮・相地を掌 る」とある.『令義解』に記された陰陽師の職掌の一つもまた「相地」であり，風水の前身たる判断だった.「相地」とは，中国の文献にもたびたび登場する風水の別名である[7]．ここにいう「陰陽師」と称する役職もまたあやしい．こんにちの中国，とりわけ浙江省一帯には,「風水先生」ではなく「陰陽先生」(陰陽師)が活躍している.「風水先生」(風水師)とは，こんにちの中国では，いわば共通語の呼称であって，方言や地方の生活語を反映したことばとは限らない．だから中国では，こんにちでもある地域では風水師のことを「陰陽先生」と呼ぶのである[8].

「地理」と同義の名称は，このように古代日本の記録のなかに，おびただしく見いだせる．名称はよいが，なにか「地理」の観察法の記録はないだろうか．そう考えると，奈良の地に平城京を造営するにあたって用いられたであろう測量法の載った，つぎの『続日本紀』の一節はたいへん興味深い.

「古 から近代に至るまで日を揆り星を瞻て, 宮室の基を起こし, 世を卜し土を相て帝皇の邑を建つ・・」[元明天皇(和銅元年(708))].

この記録のあとに,「四禽図に叶い」という四神相応の地の判断を行った記録が続くのだが，ここに記録された「日を揆り星を瞻て」とは，国都造営にあたって行われた測量であろう．しかしこれは磁鉄を用いた羅針盤による測量ではなく, それ以前の「土圭法」に類似した方法による方位確定であろうことが分かる．すなわち日中は太陽の影で方位を測定し，夜は北極星その他の星辰を測定して方位を定めていた，中国殷周期からの測定法とすこぶるよく似ているのだ【図 1】.

図 1　土圭による方位測定法（土圭法）

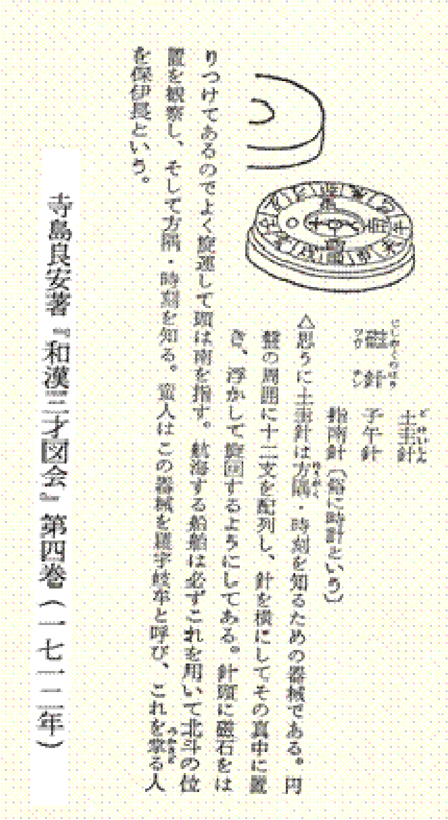


3　江戸期の方位測定具

時代はずっと下って江戸時代．その江戸時代の百科辞典である寺島良安著『和漢三才図絵』巻四に，日本の風水科学を知るうえで興味深い図と記述がある．のちのちに発展したコンパスを当時は「土圭針」と呼び,「土圭針は方隅・時刻を知るための器械である」などと解説しているのである[9]．その別名を「磁針・子午針・指南針」とし「俗に時計という」と解説している【図 2】．方

位を測る方法としての「土圭」が，のちのち日本では「時計」となったというわけだ．

図 2　寺島良安解説の指南針



土圭針
子午針
磁針
指南針（俗に時計という）
△思うに土圭針は方隅・時刻を知るための器械である。円盤の周囲に十二支を配列し、針を横にしてその真中に置き、浮かして旋回するようにしてある。針頭に磁石をはりつけてあるのでよく旋運して頭は南を指す。航海する船舶は必ずこれを用いて北斗の位置を観察し、そして方隅・時刻を知る。蛮人はこの器械を羅字岐平と呼び、これを掌る人を保伊長という。

寺島良安著『和漢三才図会』第四巻（一七一二年）

『和漢三才図絵』は 18 世紀初期の書物だが，しかし「土圭」が時刻を知る道具の名称だったことは，じつはそれより 100 年以上前，1603 年に日本イエスズ会によって刊行された『日葡辞書』に記録がある．この辞書には,「土圭」は「Toqei　トケイ(土圭) 時計」とある．訳を「時計」としているが，それというのもその用例や関連語に「Sunano toqei(砂の土圭)，関連語として Rococu［ロッコク漏刻］;Toqifacari(時計り)」とあるからで，当時からイエスズ会宣教師たちが主として滞在した西日本では，時間計測具として「土圭」を認識していたことが分かる[10]．

注目したいのは時刻を計る器械としての「土圭」より,「方隅を知るための器械」としての「土圭」だ. 寺島良安の図によると，それは現在の日本で家相判断に用いられているようなコンパスなのだ．だから「指南針」なのであり「磁針」なのだ．寺島良安が載せた「土圭針」は，中国宋代において，羅盤の発明後，さらに航海用に開発された「航海用羅盤」である[11]．この「航海用羅盤」は地相判断の羅盤を簡略化したもので，日本ではじじつ近年まで小型船舶の航海用コンパスとして用いられてきた【写真 2】．これをいまの日本では，家相判断の道具に用いているのだから皮肉だ．中国では風水判断の道具としてではなく航海用に改良した道具なのであって，むろん家相判断などできるはずがないものだ．

写真 2　小型船舶用方位磁石（日本）

鋼の針を用いた羅盤が中国で発明されたあと，それまでの日影計測による「土圭」の方法を引き継いで，羅盤を測量具に用いた歴史が中国にある．何重にも目盛りを刻んだ羅盤ではなく，目盛りを 1 種類にして密にし，正確な方向や角度を計測しようとした羅盤だ．

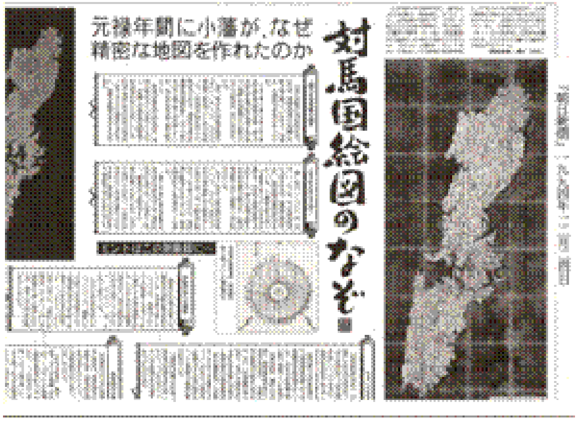
このような羅盤もまた，江戸期の日本で用いられていた記録がある．地相占いの羅盤と混同しやすいので，これを当時の日本の測量術の名にちなんで「盤鍼(ばんしん)羅盤」と称しておこう. 江戸期には鉱山開発が盛んで，坑道の掘削などに正確な方位や角度を計測する必要があった．その例に佐渡の大疎水工事に用いた「盤鍼羅盤」が残っている[12]．

「羅盤は 32.4cmの角板の中央に羅針を装

置し, 径 30cm余の円周を 480 度に分け東西の符号を逆に銘刻している．別に羅盤の付属器があって細線が張られ，これを羅盤に重ね磁針と細線とを一致させて円周の度数を読んだ」ものだという．この「盤鍼羅盤」が使用されたのは元禄 4 年(1696)以降の工事だというから，江戸時代初期には羅盤は測量具としてすでに鉱山開発に用いられていたことが分かる．

日本風水科学史の探索は続く. 1994 年 12 月 24 日の『朝日新聞』の記事に，「対馬国絵図のなぞ」と題する特集記事が載った【図 3】．その解説によると「江戸時代の元禄年間に，幕命により各藩が『国絵図』を作った．対馬藩が元禄 13 年(1700)に献上した対馬全島図は，その形の正確さで際立っている．宇宙衛星から撮影した写真と比べてみれば，一目瞭然である．江戸後期の地理学者として知られる伊能忠敬が，対馬の測量に訪れる 110 余年も前に作製されたが，忠敬も正確さに驚嘆している」としている．このような正確な地図を描くのに，どのような道具が用いられたのか．その答えは古文書中に描かれた「磁針盤」にあった．その「磁針盤」は，「十干十二支による 24 本の方位線，さらに 96，192，384 と 3 種の目盛りに細分してある」道具だという．

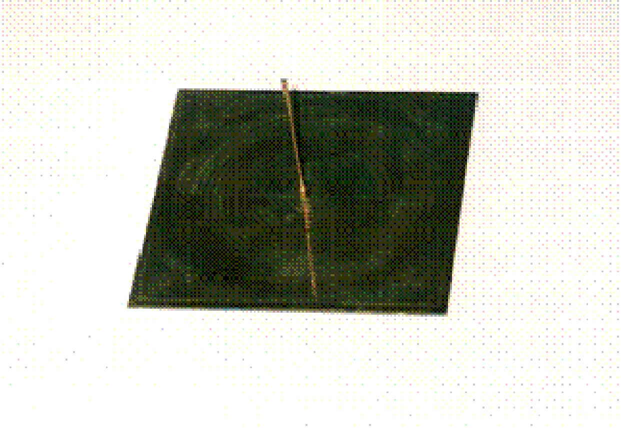
図 3　新聞記事「対馬国絵図の謎」


元禄年間に小藩が,なぜ精密な地図を作れたのか
対馬国絵図のなぞ

4　謎ではない日本の風水科学

これだけの記述から判断しても, その「磁針盤」が先の「盤鍼羅盤」と基本が似たような方位測定具だったことが分かると思う．先の記事では，対馬の国絵図は日本の地図測量史上の謎だとする．なるほど日本の測量史上の謎にはなるだろうが，風水研究を推し進めていくと，このような謎が決して謎ではなく，科学技術史のある種の必然性のうえに発展してきたものであることが分かる．このような測量方法は中国では天然磁石の使用以前の漢代から，太陽で方位を測る測定具としてすでに開発されていた[13]．俗称「太陽羅盤」(正方案)がそれだ【写真 3】．「太陽羅盤」そのものは日影計測による方位測定具だが，その後の羅盤の発展により中心の棒が磁針に変化して用いられてきた．それを日本では少なくとも江戸初期には「盤鍼羅盤」として，すなわち「盤鍼」(磁針)による測量具として鉱山開発などに用いられていた．そんな科学技術が日本にすでに蓄積されていたからこそ，宇宙衛星から撮影した写真と比べても決して劣らないほどの対馬国絵図ができたのだと思われる．

写真 3　清代の太陽羅盤（正方案）模型



風水判断が動機で発達した中国の方位測定法や土地測量の技術は，その後アラビアやヨーロッパにも波及した[14]．だからいまは，風水研究を改めて全世界的規模で見直さなければならない．そんな時代に至っていると思われる．

Ⅱ　日本の風水占術史

1　日本における「風水」の出現

すでに述べたように「地理」には「風水」のほか，「相地」「相宅」「堪輿」「陰陽」「青

烏」などのさまざまな別名があった[15]．日本古代の文書記録にも，おおかた中国古代に用いられていた「地理」と同義のことばが散見できた．しかし知るところ，こんにち広く普及している「風水」の二文字が，日本の古代文献に見当たらない．だから日本には,「風水」はもとより，風水の知識までほとんど受容されなかったのではないか,などという指摘もある[16]．じっさいはこのような指摘とちがって，金孝敬がかつて指摘したように[17]，日本古代には風水の知識が受容され役立てられていた．しかし果たして「風水」という地理の別名は中国や韓国(朝鮮)にあって，日本になかったのだろうか？

のちほど述べるように江戸時代には,「風水」，あるいは「地理風水」という名称は，当時普及していたさまざまな家相書に認められるようである．この時代の家相書を分析した村田あがによると，寛政 10 年(1798)刊の松浦東鶏の著した『家相図解』には，「風水」の名でさまざまな占法が解説されているという[18]．それ以後，その他の江戸期の家相書にも,「風水」の語や用例も至って豊富に見いだされ，風水判断が中国や朝鮮と同じだったかはともかくとして，占術としての「風水」の知識はまぎれもなく日本に導入されていた．

2　環境判断としての「風水」

つぎの疑問は，では「風水」の語は近世の輸入語だったというほど，日本では新しい知識だったのかということだ．なおまだわたしは探求中だが，目下わたしが知る最も古い証拠は，鎌倉にある臨済宗円覚寺派の総本山・円覚寺の記録『円覚寺文書』に残る一節に認められる[19]．

「一，塔頭事　所望人雖帯御教書，於敷地者，寺家評定衆並官家奉行人相共，見-知其地形，爲山門風水無相違者，就寺家注進，可有其沙汰矣,・・左馬頭源朝臣(花押)」（[境内に塔頭(別院)]を建てることを希望している者は幕府の許可状をすでに所持している．しかし，さらに建てる敷地については，寺家の評定衆と官家の奉行人の双方が地形を判断し山門を造り風水の善し悪しを見定めたうえで, 寺家から注進を行って，その沙汰を待つべきであろう・・左馬頭源朝臣(花押)）[文和 3 年(1354)9 月 22 日].

一言で「風水」とは言っても，中国・韓国や日本では「風水」は，大別して二様の意味がある[20]．一つは「自然」の言い換えとしての風水で, 用例としては日本語の「風水害」がその典型例だ.「風水害」とは自然災害を言うのであって, 決して「風水(術の)害」なのではない．もう一つは，なんらかの判断対象となって再認識された自然環境をいう. 人間にとって「善いのか悪いのか」,「吉か凶か」という判断を伴う自然およびその影響だ.『円覚寺文書』に登場する「風水」は，明らかに後者の自然であり環境を指している．『円覚寺文書』の「風水」は，明らかに何らかの判断対象となった風水だということは，前段の「見-知其地形，爲山門」という一節でわかるだろう．みなみな周囲の地形を十分に知って，山門を位置づけた「風水」だからだ.

『円覚寺文書』に記録された「風水」が，目下わたしが知る日本で最も古い「風水」という語の出現だが，では室町時代初期から江戸期にかけて，「風水」の語が出現したと考えるべきかどうか，なお疑問が残る.

刊行の時期は江戸期の家相書に見られる「風水」より古いが，記述されたその内容がおそろしく古い日本の記録がある．医師で儒学者だった黒川道祐は，山城国の地誌として『雍州府志』を著した. 貞享 3 年(1686)のことだ．そのなかにたいへん興味深い記述がみえる.

「平等院 朝日山と号す．宇治川の西にあって，ここは昔，左大臣源融公の別荘のあったところである．その後，陽成院・宇多帝・朱雀帝三代の主上が，しばし御遊の地として遊猟飲の興を催され，行宮を宇治院と号した．一条院のとき，左大臣雅信公の領地となったところである. 長徳 4 年[998],御堂関白道長公はこの地の風水を愛でて，ここに別荘を構えた．ときどき往来しては息男宇治関白頼通公の永承 7 年[1052]には，住宅を廃して仏寺とした．その構えは中華

の模範を慕って造られたものである．堂は鳳凰形を象り，左右の閣は両翼を比(なら)べ，後廊は尾を表現している．これ鳳凰造という [『雍州府志』巻 5][21].

黒川道祐は,何を根拠として平安期に「道長がこの地の風水を愛でて，ここに別荘を構えた」と記したか，わたしにはわからない【写真 4】．黒川が原資料とした文書に，「風水」の二文字があったのかどうか．江戸期にはすでに「風水」のみならず,「地理風水」などと称してひろく巷間に風水術が知られていたから，文中にいう「風水」とは黒川自身の解釈とも考えられる．しかしこの文中の「風水」は，いずれにしても二様の「風水」のうち，両様の意味でとれる内容となっている．文中の「風水」を「自然」と訳しても，「整えられた吉祥の自然」と訳してもなんらおかしくはない．ただ風水判断は，こうした住宅の自然環境の吉地にこそなされるべきものだった．

写真 4　風水を愛でて藤原道長が建てた別荘＝平等院鳳凰堂

3　子孫の禍福を説く「風水」

『円覚寺文書』や『雍州府志』に登場する「風水」は，いずれも土地測量に伴う「地理」の知識というより，環境や方位の善悪・吉凶を判断するための「地理」の知識だと考えられる．すでにわれわれは，方位測定具の発展史を追うなかで，土地測量術としての「地理」の知識を知ることができた．土地測量術の「地理」の知識には，しかし環境や方位の善悪・吉凶を判断するという内容がなかった．したがってわれわれは，江戸時代前後にすでに二様，あるいはそれ以上の「地理」の知識があったと想像できるのだが，全体に「地理」は当時，どのように認識されていたのだろうか．このような疑問に関して，その答えを知るに興味深い記録が見られる[22].

江戸期の地理学者・西川如見の著した『両儀集説外天文義論』(正徳 2 年[1712])には，以下のような問答がある．要点をかい摘まんで，これを現代語に訳してみると・・，

「問い：中華の書で地理というのは，みな風水という意味で，家宅廟墓の吉凶だけを論じている．地理というのは，そんな意味なのだろうか」

「曰く：地は太虚のなかにあり大気が上がっている．大気が乾燥すれば地は乾き，湿れば地は潤う．寒くなれば固くなり，風が吹けば動き，火があれば温まる．これが本来の地理学である．地理には大地全体を論ずる地理，一国について説く地理，一家一宅の地理がある．地理を選ぶとき，日がよく照って陰湿でなく，清水が潤沢で氾濫することなく，風がよく通って滞ることなく，土地が堅固なところは，人が住む宅としては病気が生ずることなく，また廟墓では死体が安穏になる．一郷一国においてもその違いがあって，土地の豊饒・不毛状態は，みな風水の細則によっている．だから一草一木を植えるのである．そのようにすることは風水を選ぶことなくして，ありえないことだ．これこそ上古の風水の吉凶を選ぶということの意味である．しかし中古以来陰陽禄命家がいたずらに興って，もっぱらその子孫の禍福を説いており，その弊害はいまに至るまで収まらない．ただし日本ではこれまで，あえてこのような風水の吉凶を説いてこなかった．これは却って上古の風に近い.どうして子孫繁栄のために，地理を選ぶ必要があるだろうか」.

中国では「地理」とは「風水」であり，家や廟，墓の吉凶だけを判断することをいう．しかし「地理」というのは，そんな意味なのだろうか，という問いに対する答えである．

西川如見の考えでは,「地理」には大地全

体から一つの家に至るまで，さまざまなレベルにおける意味がある.「風水」とはその地理的条件であり，その条件にこそ吉凶がある．上古の昔からの判断は，地理的条件の善し悪しを判断することがその吉凶判断だった．日本ではこのような判断を説いた者はいなかったが，地理的条件はあえて解説する必要のないほど必然的なもので，だから説いてこなかったということそれ自体，本来の地理認識に近く上古の習慣に近い．しかし中古より興った「陰陽禄命家」たちは，もっぱら子孫の禍福という吉凶を説いており，その弊害はいまに至るまで収まっていない．どうして子孫繁栄のために，地理を選び地理的条件の吉凶を判断する必要があるだろうか.「地理」は日本では，子孫のために選び取る対象ではなく，自然に備わった条件をよくするために選び取るものだ.そんな意味だとわたしは理解している．

しかし西川如見の指摘で興味深いのは，中古には「陰陽禄命家」が興って，もっぱら子孫の禍福という吉凶を説いており，その弊害はいまに至るまで収まっていないと指摘していることだ．これは文脈から判断して中国の事情を言ったものだろうが，しかし当時の日本もまた，子孫の禍福，人間生活の吉凶を説く家相見が存在し，時代を経るにしたがって増大したことは家相書の刊行の増大がそれを裏付けている[23]．

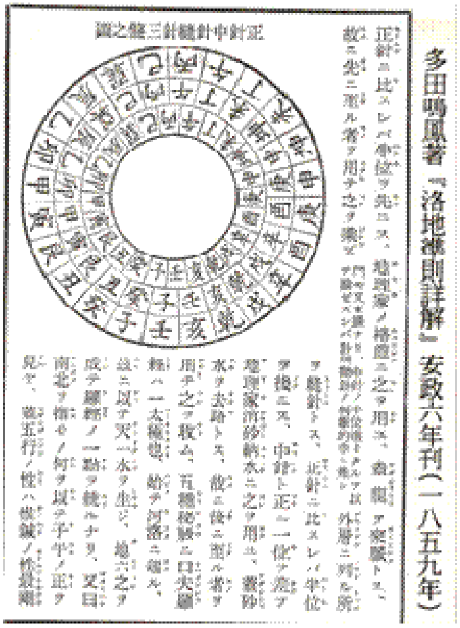
4　風水占術に残された科学知識

こんにちの家相判断や風水判断書を見ると，煩わしいほどに非科学的でスコラ的な判断項目があがっている．しかも家相書・風水書ごとに判断は違うから，学術的な価値があるなら家相見や風水師たちの主観や偏見を比較検討してみたい衝動にかられるが，ここは風水の科学技術が残した「科学の痕跡」を紹介することだけに留めておきたい．

日本の家相判断は東アジアに類例がないほど特殊で奇妙な判断項目が多いが，なかには東アジアに共通した判断も認められる．それは原典や学派が同じだからということもあるが，それを越えた科学的根拠に根差していたことにもよっている．

江戸時代末期の安政 6 年(1859)，多田鳴鳳が著した『洛地準則詳解』という家相書に載せられた「正針中針縫針三盤之図」という図がある【図 4】[24]．これは幾層にも方位判断の項目が描かれた羅盤に記された，3 つの方位判断項目だけを取り出したものである．その 3 つとは，「正針」(最内円)，「中針」(中間円)，「縫針」(最外円)と称する項目で，十干十二支と八卦がそれぞれ 24 に配分されて刻まれている．

図 4　多田鳴鳳著『洛地準則詳解』に描かれた風水判断の例



おかしなことに，この 3 つの円は，みな同じ文字の配列の目盛りになっておりながら，最内円と中間円は 7.5 度，中間円と最外円は 15 度ずれている.これで方位の吉凶を判断するのだが，第一に方位を判断するなら同種の目盛りを 3 つも描く必要があるかということだ．方位を知りたいなら，1 つだけでよいのではないか．第二に同じ配列でありながら，なぜ 3 つの円はそれぞれ微妙にずれているのかということ．どの目盛りに合わせて方位を測ったらよいのか，判断者を迷わせることにはならないか．

答えはいずれも否である．同種 3 つの目盛りがあるのは,方位に偏角があるからだ．そして磁北極は常に変化している．偏角と

は，地理的な北極と磁気の北極との角度の差である．ある世紀に真北だった方位は，つぎの世紀には真北を示さないだろう．もしも末長く吉福を得たいなら，常に変化する方位の変化を予測して，つぎの世紀の吉方をも定めておかねばならない．そのための未来の(しかし実際の目盛りは過去の)方位を判断するために，3 つもの同種の方位が用意されているわけである．中国ではこの偏角を遅くとも 8〜9 世紀には発見していたとされ，ヨーロッパで偏角を知ったのは，中国に遅れること数百年，14 世紀末だった[25].

方位の目盛りがずれておらず，一種しかないコンパスで吉方を計測するだけで済むなら,それは束の間の吉方判断でしかない．原則的な同種 3 つの目盛りの存在理由はそうなのだが，かつての日本の家相見や現在の中国の風水師が判断しているのは，室内の方位は「正針」，門の位置は「中針」，山川の方位は「縫針」などと対象によって項目を違えるにすぎない．偏角という，この世界の科学技術史上の大発見を知ってか知らずか, こうしていまも中国では風水師(陰陽師)が精巧な目盛りの描かれた羅盤を用いて，お客のために方位の禍福判断に勤しんでいる．

結語　模範や表象としての「中国」

日本の古代史料に見る限り，少なくとも 602 年に百済から「天文地理」の書がもたらされ，それ以後の宮都造営には風水判断がたびたびなされてきたことは，以上のように疑いないようである．風水知識が日本にもたらした国が，当時の「百済」だったとはいえ，その後の日本の記録では中国を模範とし，中国の例にならって遷都から風水判断までなされてきた．たとえば『続日本紀』巻四,「和銅元年（708 年）二月戊寅（十五日）」の元明天皇の詔の一節には，次のように記されている．

「・・昔，殷の諸王は五回遷都して，［国を］中興したという聞こえを受け，周の［西伯・武王・成王らの］諸天子は，三たび都を定めて太平のほまれを致した. 安んじて，その久安の住居を遷(うつ)そうと思う．まさにいま平城(なら)の地は,［青竜・朱雀・白虎・玄武の］四つの動物が河図(かと)に相応じ，三つの山が鎮(しず)めをなしているところである」[26].

この一節は藤原京から平城京に都を移そうとしたときの，元明天皇の詔にみるその理由の一つだが，遷都の例を中国の歴史の数々の例に求め，日本もそれらに倣おうとしていたことが，これで分かる．またすでに紹介したように江戸時代，黒川道祐の描いた『雍州府志』の「長徳 4 年[998]，御堂関白道長公はこの地の風水を愛でて，ここに別荘を構えた．・・永承 7 年[1052]には住宅を廃して仏寺とした．その構えは中華の模範を慕って造られたものである・・」という記録もまた,「中華」を模範とし「中国文明」を表象する日本建造物の創造だった．さらに西川如見の「風水占い術」の普及に対する批判や懸念も，中国上古の例を模範とした中古以降の時代批判であったし，じじつ西川如見が懸念したように，日本では江戸中期以降，風水による家宅の吉凶判断が盛んになされていた．長崎から取り寄せた中国の風水書の多くが，日本式に翻訳されて普及していた[27]．江戸期に至って中国の影響は,「家相」などという日本式の発想に改造されてはいたものの，もはや日本の生活の隅々にまで至っていたというわけである．

明治期以降，今度は欧米を模範とするようになり，日本政府は東アジアに根付く淫祠邪教を禁止し，戦後も政府は迷信撲滅や生活改善運動を行ってきた[28]．こうした政策は現中国にもあるが，政策的に禁止や撲滅を進めると，なぜか地下活動や民間の活動として「盛んに」なり，かえって風水占い判断が巷に普及してしまう．現代日本の風水占いブームは 1990 年代からだが, その知識を香港・台湾・韓国からだとして輸入改造し，いまや日本的な独自の風水民俗にもなっていることは，時代が移ろうと前近代の日本がなしてきたこととほぼ同じである．そして改造された特殊日本的な「風水」もまた世界に広がっていることは，決して不思議ではない. インドの「ヴァストゥ」(風

水術)を含めて，風水が中国スタンダードばかりでなく「複数の東洋スタンダード」な知識や思想が，グローバル化している証拠でもあろう[29].

---

[1] 中部大学国際関係学部教授

[2] Needham,J. & Wang,L. 1959 Science and Civilisation in China,Vol.2.Part2.[東畑精一・薮内清監修 1991 『中国の科学と文明』巻 3，思索社，403 頁]

[3] Needham,J. & Wang,L. 1959 Science and Civilisation in China,Vol.3.Part3.[東畑精一・薮内清監修 1991 『中国の科学と文明』巻 6，思索社，5 頁]

[4] Temple,R.K.G. 1986 China:Land of Discovery and Invention,[牛山輝代監訳 1992 『図説・中国の科学と文明』，河出書房新社，258－259 頁]

[5] Temple,『前掲書』，258 頁

[6] 牧尾良海 1994 『風水思想論考』，山喜房仏書林，170 頁，黄永融 1999 『風水都市－歴史都市の空間構成－』，学芸出版社，65 頁，ほか

[7] 王其鈞 1991 『中国民居』，上海人民出版社，87 頁

[8] 渡邊欣雄 2001 『風水の社会人類学－中国とその周辺比較－』，風響社，183 頁ほか

[9] 寺島良安 1712? [島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳訳注 1986 『和漢三才図絵』巻 4，平凡社，10 頁]

[10] 『日葡辞書』: Vocabvlario da Lingoa de Iapam com a declaração em Portugues[土井忠生・森田武・長南実編訳 1980 『邦訳・日葡辞書』，岩波書店，662 頁]

[11] 王其亨編 1992 『風水理論研究』，天津人民出版社，226 頁

[12] 小林行雄・小葉田淳 1962 「採掘・冶金」『日本科学技術史』，朝日新聞社，404 頁

[13] 程建軍・孔尚朴 1992 『風水与建築』，江西科学技術出版社，80 頁

[14] Temple,『前掲書』，255 頁

[15] 王玉徳 1991 『神秘的風水』，広西人民出版社，7－11 頁

[16] 池上・島園・徳丸・古家・宮本・鷲見編『日本民俗宗教辞典』，東京堂出版，89 頁

[17] 金孝敬 1938 「日本に於ける風水信仰に就いて」『日本宗教学大会紀要』4，154－159 頁

[18] 村田あが 1999 『江戸時代の家相説』，雄山閣出版，23－25 頁

[19] 鎌倉市史編纂委員会編 1956 『鎌倉市史』(史料編第 2)，鎌倉市，192 頁

[20] 王玉徳 1991 『前掲書』，6－7 頁

[21] 立川美彦編 1997 『訓読・雍州府志』，臨川書店，192－193 頁

[22] 田里友哲 1983『論集・沖縄の集落研究』，離宇宙社，176－177 頁

[23] 村田あが 1999 『前掲書』，各所

[24] 多田鳴鳳 1859 『洛地準則詳解』[水魚道人注解 1933，大文館書店，22 頁]

[25] Temple,R.K.G. 『前掲書』，262 頁

[26] 直木孝次郎他訳注 1986 『続日本紀』1 巻，平凡社，99-100 頁

[27] 宮内貴久 2006 『家相の民俗学』，吉川弘文館，59 頁

[28] 宮内貴久 2006 『前掲書』，172 頁

[29] Christian Daniels ed. 2006 ***Remarking Traditional Knowledge; Knowledge as a Resource,*** Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 所収の諸論文参照